

第5回 キャリアセミナー レポート

作成者 市川 諒

講演内容

今回のキャリアイベントはトヨタオーストラリア様（以下トヨタ）のアルトナ水素センターにて実施されました。水素センターで実際に水素自動車を見ることで、最新技術に触れる貴重な機会を得ました。また、トヨタオーストラリアの副社長である神埜様と2名の社員の方々をスピーカーとしてお招きしました。講演内容は以下の3つに焦点を当てた。

①トヨタの企業説明

トヨタのオーストラリアでの発展の歴史と水素自動車への取り組みについて学んだ。

②トヨタのキャリアについて

谷様、佐々木様の一週間のタイムスケジュールを共有しながら、実際にトヨタでの実際の業務内容を教えていただいた。

③水素ステーション見学

水素自動車やその部品を見学し、水素がどのようなエネルギーで、水素自動車がどのように機能するかについて学んだ。

要約・感想

トヨタは数々の人気車を手がける、自動車業界のマーケットリーダーである。オーストラリアには300ものディーラーを展開し、その人気は確固たるものだ。そしてオーストラリアトヨタの中で最も注目されているのが水素自動車だろう。

しかし、オーストラリアトヨタが水素事業に至るには興味深い歴史がある。最初にオーストラリアへ上陸したトヨタ車はランドクルーザーだった。トヨタと言えばカローラなどの車を想像する人が多いため、会場には驚きの声が上がった。きっかけはスノーウィーマウンテンでの水力発電プロジェクトだった。このプロジェクトは世界で最も複雑な灌漑と水力発電を統合した計画の一つで、全米土木学会から世界クラスの土木プロジェクトと評されている難

関プロジェクトだ。当時の現場は過酷で、他の車では太刀打ちできず難航していた。そこにランドクルーザーが最後の切り札として投入されたのだ。プロジェクトは無事成功を収め、これを契機に多くのトヨタ車がオーストラリアでも生産、販売がされてきた。

オーストラリアでは主にカムリを中東へ販売していた。ここで神埜さんから面白い話があった。トヨタ車は外見は同じでも国によって内装が異なるらしい。国の道路状況、気候、規制、そして客の好み内装を大きく変えるそうだ。同じカラーでも高級感を出すのが中東、エントリーグレードとするのがオーストラリア。中東の車はより凝った内装が求められる。トヨタは国とお客に合わせて、どこで何をやるかまで考えるという計算し尽くされたグローバルビジネスを展開していた。

しかしながら、そんなトヨタがオーストラリアから撤退したのには訳がある。それは自動車産業ならではの理由だ。自動車産業には **tier** と呼ばれるピラミット構造があり、小さな部品が集まって最終的に車ができるというものだ。つまり車を生産するには部品を作る会社、環境など多くの条件が求められる。しかしながら、オーストラリアに工場を持つ、他の自動車メーカーが撤退した。ここで注目すべきはトヨタだけでは部品メーカーなどが十分な利益を生み出せないという点だ。そのため、トヨタは自動車生産から撤退の決断をしたのだった。自動車産業というのは車と同様に全てのパーツが揃って初めて動くものだと感じた。そしてそのパーツに競合他社も含まれるというのが興味深い。しかし、当時トヨタはすぐに撤退するのではなく、従業員の再就職の支援などを行い、時間を費やした後に撤退した。自動車産業をリードする大企業としての責任のようなものを感じた。

そして工場撤退後の候補として水素自動車事業が選ばれたのだった。私は恥ずかしながらこの会が始まるまで、水素自動車は **SDG's** を意識した広告塔のようなものだと思っていた。しかし、トヨタのビジョンは想像を超えるものだった。トヨタは水素自動車を環境問題への解決策という理由で採用したというより、一つの燃料として採用したという印象を受けた。神埜さんは「トヨタはエネルギー会社になりたいわけではない。トヨタは自動車メーカーだ。エネルギーがなければエンジンは動かない。国の資源、お客の財力などを考慮しながら最適なエネルギーを選んで車を作る。オーストラリアでは水素にエネルギーとしての価値があると思った。」と述べられた。全ての車が水素で動くことは現実的はない。今できることを徹底した利用者目線で実現しようとしているのだ。実際に水素自動車を1台導入するのとプラグインハイブリッド (PHEV) を6台導入するのでは同じ効果がある。水素より電気が我々の生活に浸透しており、新たに水素自動車を生産するよりも効率が良い。今、世界にできることを全力ですというトヨタのやり方に深く共感した。そして最後に神埜さんは「トヨタが今やっていることは世界のトレンドだからやっているわけではない、しかし近い未来、トヨタのビジョンと政府のビジョンが重なるのではないだろうか。」と締め括った。

トヨタのキャリアについては佐々木さんと谷さんにお話し頂いた。お二方はまずの就活時代の軸について言及し、グローバル展開がカギだったと語られた。佐々木さんは入社後の裁量の大きさも軸の一つだったという。実際に佐々木さんが担当した部署では一人一カ国を任されていたといい、その経験から得られるものは大きいだろう。そして、谷さんは駐在員ならではの苦悩を明かしてくださった。それはマネージャーとして業務効率化などの全体指示をするが、直属の部下がないという点だ。業務内容は情報集めや、日本とオーストラリアの

橋渡しをすることが多く、自分がどれだけ会社、社会に貢献できているかを定量化できない
そう。だが、本社と海外で親密な連絡を取ることは重要な役割であり、そこにやりがい
を感じるのも事実だ。バランスを取るのが難しいと述べられた。佐々木さんと谷さんに共通し
て言えることはプライベートがとても充実していることだ。

お二方が駐在員のある一週間と題して、一週間のスケジュールを紹介してくださった。日本
との違いは昼食時間が固定ではないことと、残業がないことだそう。仕事のオンオフがは
っきりしているからこそ、社外での同僚と時間もとても楽しいと語られた。お二人とも休日
は同僚とゴルフに行くそう。谷さんは同僚のクリスマスパーティに招待されるなど、本
当に仲睦まじい様子だった。

今回のイベントへの参加を快諾、準備してくださった、神埜さん、橋本さん、谷さん、佐々
木さんに厚く御礼申し上げます。自動車産業がどのような産業なのか、そしてトヨタの水素
に対する熱い思いがとても伝わってきました。また、トヨタの自動車産業のリーディングカ
ンパニーとしての責任と貢献については私自身深く感銘いたしました。

メルボルン日本商工会議所の根本様にもイベントの様子を視察していただきました。お忙し
い中、我々のイベントの運営にご協力いただきありがとうございます。今後もより良いイベ
ントを企画し、学生と企業の架け橋となるよう尽力してまいります。

グローバルキャリアパスメルボルン

市川



集合写真



水素給油機



水素タンク



水素センター



水素自動車ミライ

